

異世界マンガ作画大賞 課題作品3 (男子向け)

◆概要

“死ねない”VRゲーム「アカシックワールドオンライン」通称AWO。
そんなゲームに関わらず、開始一時間で死んだ主人公・荒津海人。死の間際に敵が持っていた魔王の剣をつかみ、ユニークスキル《ひとつかみの英雄》を発動させる。
すると謎の赤髪の少女が現れて……！？

◆キャラクター設定

○荒津海人 (プレイヤーネーム:カイト)

年齢20、身長175、体重65、主人公

特徴:元々は明るい性格で高校時代はバドミントンの全国選手だった。

動体視力と瞬間的な判断力、手首のスナップの強さなどに優れている。

あがり症で、自己暗示による思い込みによって緊張を克服していた。

自分の我が儘がキッカケで実母を喪っており、罪の意識で人前が出るのが怖くなったが、次第に心を封印し、平常を装おうようになった。

○ユースティティア (愛称:ティア)

年齢享年18、身長大剣時:120、人間時:160、メインヒロイン

特徴:意思のある武器(インテリジェンスウェポン)で、大剣の姿から擬人化でき

る。人のことを覚えるのが非情に苦手で、滅多に他人を名前では呼ばない。勇者時代のトラウマで、関わった人が死ぬことに耐え切れず、心が勝手に拒否するようになっていた。身体は剣なのに人を傷つけるのが怖い。

「キミは見る目がないな」が口癖。

◆課題小説（一部シーンを抜粋して、4～8P程度の完成原稿を仕上げてください）

※ここまでの展開

ゲームを始めて最初の村に滞在するも、突然の魔族の襲撃を受けて致命傷を負った主人公・荒津海人。助からない怪我を負わされ、村人が次々と襲われているのをただ見ることにしかできないところから。

賞金をゲットしてやるぜと意気込み、プレイを初めて僅か1時間でこの有り様である。

『魔王を討伐するため、神はプレイヤーを勇者候補としてこの世界に遣わせた』

そんな使命を預かったばかりの俺が、最初の村で準備を整えていたところでの襲撃だった。

「たっ、たのむ！！ やめてくれ……」

今、武器屋の物陰に隠れていた男の村人が魔族の一人に見つかってしまった。

あの人はいわゆるチュートリアルとして、冒険者ギルドでスキルと探索のイロハを俺に教えてくれた、この村一番のベテラン冒険者だ。

俺に披露してくれた鋭い剣戟は繰り出すことすら叶わず、彼は猪頭の巨漢が持つハンマーで頭から容赦なく叩き潰されてしまった。

「……………」

別の場所では、少女がカバほどの大きさもある犬のモンスターに組み敷かれている。彼女は道具屋の店員で、俺に回復薬のポーションをオマケしてくれた優しい子だった。そんな彼女は口を半開きにしたまま、生気のない濁った瞳をこちらへ向けていた。

田舎の平和だった村が、あっという間に地獄へ変わってしまった。

いくら R-18G、エログロありの | ゲーム《フィクション》だからといっても、限度っていうものがあるだろうが。序盤で村が崩壊してヒロイン候補が凌辱されるなんて、どんな鬱ゲームだよ。

そんなことを心の中で吐いているうちに、この惨状を作り出したモンスターたちの親玉が目の前へやってきていた。

「……貴様が神が送り込んだとかいう、勇者候補か」

角の生えた青白い大男は、燃え盛る炎のように深紅色に輝く大剣を俺に向けた。

——クソが。悪魔みたいな顔しているくせに、武器だけは立派なモン持ってんなコイツ。

「どうだ、死ぬ前に魔王様の配下として生まれ変わる気はないか？」

「はは、なんだそれ。さすがにベタ過ぎんだろうが……」

いくらゲームだからといって、ここで敵に寝返る選択肢はない。絶対にお断りだという意思を込めて、俺は魔王の部下らしき悪魔を睨みつけた。

——と、そこで視界の端にとある人物が見えた。

「あれは定食屋のおばちゃん……頼む、逃げてくれ！！」

だがおばちゃんの耳には俺の声は届かず、火に包まれた店の前でペタンとへたり込んでしまっている。あの定食屋は『VR での味覚ってどんなもん？』と思った俺が、この世界で一番最初に入った店だった。

若者から年寄りまで、多くの客の笑い声に包まれている繁盛店。そこで食べた生姜焼き定食は何故か母さんの味がして、不覚にも俺は泣きそうになった。

そんな素敵な店が今、轟々と音を立てて燃えている。

「アタシの店が……」

不味い。おばちゃんのすぐそばまで、ハンマーを持った猪頭が近付いてきている。

だけとおばちゃんは奴に気が付いていない。

気を付けていってらっしゃいと笑顔で俺を送り出してくれた、あの優しいおばちゃんがこのままでは――。

「ふっ、情けない勇者サマだな。まるで生まれたての小鹿のように震えているではないか。勇猛だった先代の勇者とは似ても似つかぬ」

「……だまれ」

「ハハハ！ 自分の身さえ守れぬ雑魚勇者が粹がるなよ！！」

うるせえ。てめえに言われなくたって、そんなことは百も承知なんだよ。

「ん、腕だけで起き上がる気か？ だがそんな身体でいったい何ができる」

「生憎と、俺は死ぬほど負けず嫌いなんぞ……」

たとえこれがゲームであろうと、目の前で人が殺されるのなんてもう見たくない。自分の中の何かが、このままタダで殺されてたまるかと吼^ほえている。

それに今の俺には、ゲームのチュートリアルで手に入れたあのスキルがある――！！

「お望みとあらばなってやるよ、その偉大な勇者とやらに。たとえ今が死ぬ運命だとしても、俺は最後の瞬間まであきらめねえぞ！！」

――ユニークスキル、“ひとつかみの栄光”発動！！

ユニークスキル"ひとつかみの英雄"発動。

右手を伸ばし、地面に転がっていた小石を握り込む。

その直後、小石が魔王の配下に向けて風を切るように飛翔した。

「ふんっ。無駄な足掻きを。死ねェ！！」

残念ながら、配下の男は俺の投石を軽々と回避してしまった。そして奴は持っていた大剣を振り上げ、俺を地面に縫い止めるように胸の上から突き刺した。

「がああああっ！！」

「最後の悪足掻きも随分と呆気なかったな……おい、主^{あるじ}様より賜った剣に汚い手で触るんじゃない」

俺は最後の力を振り絞り、自分に刺さっている剣を右手でがっちりと握り込む。

お前にとっちゃただの雑魚かもしれないが、高校時代にバドミントン部で鍛えた俺の握力を舐めんよ。このままあの人^{おばちゃん}をただで殺させるわけにはいかねえ！！

「ちっ、雑魚のくせに余計な手間を……ん、なぜ剣が動かぬのだ？」

へっ、ざまーみろ。そして頼むおばちゃん、今の内に逃げてくれ……！！

「おい貴様、我が剣に何をした！！」

「ユニーク、スキル……握った物を……握った時間だけ操れる……」

だめだ、もう目蓋が重い。さっきからヒットポイントが残り僅かであることを知らせるアラームが、頭の中でガンガンと鳴り響いている……。

「くそっ、この死にぞこないの雑魚勇者が……早く諦めろ！！」

「ぐううっ！！」

魔王の配下は未だ俺の中を貫通している剣をグリグリと動かし、どうにかコントロールを取り戻そうとする。やがて俺のスキル効果時間も切れてしまい、もはやこれまでかと思った瞬間。剣の動きがピタリと止まった。

「彼が雑魚？……見る目ないね、キミ」(編集部注：ヒロイン、ユースティティア)

ん？ 誰の声だ？

「誰だ貴様は。いったいどこから現れた……いや、待て！ その赤髪はまさか……ど

うして貴様がまだ生きている！！」

ん、魔王の配下じゃないのか？ もしや誰かが助けに来た??

ワケが分からず、俺は全てを諦めてアへ顔をキメていた。彼女が何者なのか、確かめる時間はもう残されていない。だからせめてこのクソ野郎に変顔で一矢報いてやる。

だが二人とも、こちらを見てなんかいなかった。

あえなく俺の意識はそこで途絶え、ゲームオーバーを迎えた。